



支部だより No.152

日本山岳会京都・滋賀支部

2023年9月15日

秋の訪れを前に

笠谷 茂

夏から秋に移ろいゆく中、いかががお過ごしでしたでしょうか。酷暑を避け、涼を求め、入渓や高い山へ足を運ばれた方も多いと思います。

今年の夏山シーズンは、北アルプス等の山岳地帯に限らず、近郊の山においても各地で遭難案件が多発しており残念な限りです。これから訪れる秋から冬にかけての山も魅力にあふれています。一方で日没時間、寒気、動植物の活動など季節の変化に伴い増大するリスクもあります。想定されるリスクに対して主体的に向き合い、事故の未然防止に努めていきましょう。山行は無事に帰宅することが大前提です。

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが5類感染症に移行しました。疫病対策を起源とする祇園祭も4年ぶりの完全斎行となり、山鉦巡行には大勢の人が集まり華やかな映像が印象的でした。支部の活動も感染拡大前の実施可能レベルに戻りつつあります。次年度以降に向け、より多くの会員が参画できる企画を支部の現状をふまえて策定していきたいと考えております。ご提案等ございましたら、役員、委員へお伝えください。

日本山岳会では2025年、創立120周年を迎えるにあたり、記念事業として「全国山岳古道調査」に取り組んでいます。全国にある無数の山岳古道の中から、文化的、歴史的、地理的な価値から記録・保全すべき120の山岳古道を選び探索・調査し、その結果をホームページ掲載、書籍化し公開することで、日本及び地方のアイデンティティを再認識することに寄与することを目的としています。また、活動を通して新しい山の楽しみ方が広がること、会の活動の活性化なども期待される所です。関連行事として2024年5月には、熊野古道集山行イベントが計画されています。

当支部においては、昨年度より古道調査委員会を設け、村上委員を中心に調査活動を実施し、9古道（鯖街道、近江坂古道、唐櫃越、旧山陰道、明智越、如意

古道、無動寺修験道の道、白鳥越、千草街道）の実働調査を20回にわたり延べ60名以上の協力を得て行い、岡田会員の力添えを頂き報告書の提出も進んでおります。今後、再確認や深堀のための調査、古道を歩く企画も実施したいと考えており、多くの会員の皆様の参加を期待する所です。また、日本山岳会としての取り組みへの関心が高まることも望まれます。そこで、活動資金面で個人負担に依存しているのが現状である中、支部として用途を古道調査に関わる費用に限定した資金カンパを行うこととしました。ご賛同いただける方は支部役員、委員へご連絡ください。

会員の皆様のご支援、ご協力を宜しくお願い致します。

活動報告

例会 シャクナゲ山行2023

比良山系

松下征文

今年は参加者9名で、ダケ道より八雲ヶ原往復としました。

天候が不安定でやきもきしましたが、何とか夕方までもちそうなので実施しました。

登山者は少なかったようです。ダケ道もカモシカ台を過ぎてくると満開のシャクナゲが目を楽しませてくれました。自分は比良のシャクナゲが一番美しいと思います。各地の山でも見ましたが、そのどれもが美しいのですが、やはり比良のシャクナゲにはかないませんね。

今年は4月16日の健幸登山教室でも、堂満岳で美しい比良のシャクナゲを楽しみました。

井上靖が「比良のシャクナゲ」という短編を書いています。その時泊まった旅館が堅田の霊峰館となっていますが、それは浮御堂のそばにあるという架空の名称です。井上靖が泊まっていたのは、料理旅館として今も営業している魚清楼のことで浮御堂のそばにあります。井上靖は比良の山なみがとても気に入っていたようです。シャクナゲも見に登りたかったようですが、



今年は咲き始めが早かった比良のシャクナゲ

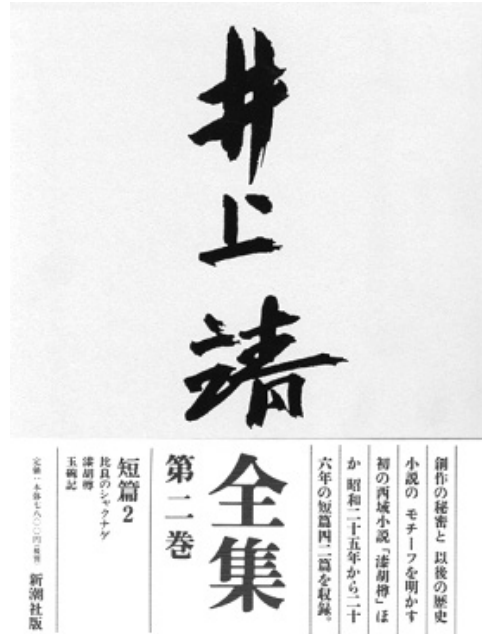
かなわなかった。彼が見たのは雑誌で見た比良のシャクナゲであった。その美しさがとても気に入ったようです。それにしても暗く悲しい小説です。皆さんも読んでみてください。

比良を眺めて「他の駄山に見られぬ気凛と風格を持っている」と書いているのがうれしい。

八雲ヶ原で昼食をして、シャクナゲ群生地を見て戻るが、天候が気になるので深入りは止めました。北比良峠に出て琵琶湖を見下ろし、登ってきたダケ道を下りました。下りは仲間が3名増えました。16:30 イン谷口に着くと雨が降ってきました。

実施日：2023年4月29日

参加者：松下征文(L)、竹下節子、藍野裕之、
上野陽子、松下征悟、藤綱珠代
(友の会) 尾形利香
(一般) 尾形基和、住吉実
下山時合流：村上正、池ノ内直樹
(一般) 川端



「比良のシャクナゲ」は井上靖全集第二巻
(新潮社) に収録されている

例会 テント泊登山の会

比婆山、吾妻山

古谷英二

比婆山系は中国山地の中核、比婆道後帝釈国定公園の一角を成し、広島・島根の県境に標高1200m級の山々が連なる山域で、山頂付近は国指定天然記念物のブナ純林に覆われ、周辺を含め「比婆山伝説地」として広島県史跡に指定されています。今回、第49回先進国首脳会議(通称：G7広島サミット)が行われる、5月19日から5月22日の真ただ中に実施した山行でしたが、おかげさまで交通の支障もなく、スムーズに終わりました。

5月20日(1日目)、前泊のテント泊地(立烏帽子駐車場)は、なんと1175mとかなりの標高であり、さすがに深夜は相当冷え込みました。テントの中では10度くらいありましたが、外は恐らく5度前後だったと思います。また、夕刻の子虫は半端なく多くちょっと悩



吾妻山より比婆山
(左から、烏帽子山、比婆山、立烏帽子山)

まされましたが、寒くなるにつれ激減していきました。例の如く、前夜祭を終え、眠りにつきました。ちなみに私のメインディッシュは“トマトソースの鶏肉煮込み”カゴメの「基本のトマトソース」は本当、重宝します。

5月21日(2日目)、6:04スタート、駐車地から立烏帽子山はいきなりの急登です。呼吸を整えゆっくりと歩を進めます。そしてなんと、この立烏帽子山が本日の最高標高点、1299mです(6:24着)。駐車地から124mしか登っていません。ただ、この後かなりのアップダウンを繰り返すこととなりますが……。

池ノ段(6:44着)に立ち寄り、比婆山へと向かいます(7:58着)。このコースの一番の見せ場と言っていい、“ブナの純林”(国指定天然記念物)を歩きます。大木あり、樹林帯ありで、目を和ませてくれました。また、途中、“御陵”と言うところがあり、この比婆山は国生みの神、伊邪那美命(イザナミノミコト)の御陵がある山として古来より信仰を集めているそうです。

さて、烏帽子山ですが、実は三角点にたどり着くの苦労しました(8:27着)。もう少しわかりやすくコースの整備をしていただくとありがたいなあって思いました。贅沢かな……？

その後、大膳原では吾妻山が眼前に見える平坦なコースとなり、そこからの雄姿は素晴らしい、の一言です。さすが「日本三百名山」の一つに数えられるだけがあります。ただ、この後本日の登りへと進みます。吾妻山からは、大山、宍道湖が見えるという360度のパノラマでした(10:15着)。

吾妻山からの復路は各ピークをバイパスするルートで立烏帽子駐車場に戻りました(13:23着)。その途中、立烏帽子山の巻道では谷筋の水量の多さに驚きました。山頂から150mしか標高を下げていないのにその豊富さはブナの保水力による恩恵だそうです。

天候にも恵まれ、最高の山行となりました。お世話になりありがとうございました。



吾妻山山頂にて

実施日：2023年5月20日(土)～21日(日)
参加者：笠谷茂(L)、田中昌二郎(SL)、今中三恵子
(友の会)古谷英二

例会 北山探訪

中山(Ⅲ中山674.5m)～
白尾山(Ⅲ北村748.5m)

宮井秀樹

当日の天候は、高気圧の後面に入っていて南寄りの湿った空気が入るので、曇りがちの天気になると予想したが晴れて湿度も高くなく登山日和となった。

美山町荒倉の登山口～白尾山のルートは尾根芯を歩いて行けば良いとは解っているが、地形図で確認できるだけでこの間に14のピークがあり、それぞれのピークから派生する尾根の中から進むべき尾根を間違いなく選んでいくのはなかなか難しいと思う。

荒倉の集落から北西に延びる林道に入り、SLが過去のGPSログを挿入し作られたルート図を参照し取付きを探す。ここから尾根芯までが足場も悪く、かなりの急登。尾根に乗ると道は歩きやすくなり、何となく道らしきルートが確認でき、屈曲点を見逃さないように歩を進めて無事に中山山頂に到着。

「支部だより」の行事案内には「少々藪漕ぎがあるかも」と書かれていたが、ここからP597までは藪漕ぎの連続となった。足下が良く見えない中、SLのルートファインディングに助けられながら前進した。私はもっぱらGPSで現在地を確認して進むべき方向をコンパスで確認しながら進む。P682の東にあるピークは広く平らな山頂で、進むべき北東の尾根が解りにくい。進行方向と進んだ距離と地形を確認し先へ進む。P677の北東

にある次の尾根から P597 へ続くルートも広く平らな藪となっていて解りづらく、南東にあるピーク (C620) へ一旦進んでみたがそこからの踏み跡はなく、少し引き返すと過去の GPS ログ上にかすかな踏み跡が確認でき P597 へ向けて進む。すると突然北側に広い林道が現れ山の景色が一変するが、林道に沿うように尾根に沿って藪漕ぎを続けながらやっとのことで P597 に到着した。ここからは白尾山への登山道が有り最後の登りを山頂へと向かう。山頂からは 360° 展望が開け遙か遠くに愛宕山も確認できた。

後は地形図にも記載されている下山口への登山道を下るだけと思ったが、沢筋に入った途端に景色が一変し、登山道は延々と倒木に塞がれている。倒木を乗り越えたり、潜ったり、迂回したりと足下に細心の注意を払いながら、何とか内久保集落までたどり着いた。

今回の例会は、地形図に登山道が書かれていないルートを歩いてみたいと思い参加したが、改めてその難しさを実感すると共に、ルートファインディングの方法を身近に勉強させてもらう貴重な体験となった。又、天候にも助けられ広葉樹林に差し込む木漏れ日や吹き抜ける涼風の心地よさ、夏の到来を告げる蝉の鳴き声やキツキの木を穿つ音など、山へ入らなければ味わうことができない自然を楽しむことができた。



中山山頂



白尾山山頂

コースタイム：登山口 (8:40) ~ 中山 (10:15 ~ 10:35) ~ P682 (11:20 ~ 11:45) ~ P677 (12:15) ~ P597 (13:00 ~ 13:10) ~ 白尾山 (13:45 ~ 14:05) ~ P597 への分岐 (14:20) ~ 下山口 (15:25)

実施日：2023年5月27日(土)

参加者：田中昌二郎 (L)、笠谷茂 (SL)、今中三恵子、宮井秀樹

例会 北山探訪

品谷山(Ⅱ佐々里村 880.7m)・廃村八丁・
卒塔婆山 (Ⅲ祖母谷 806.0m)

瀬崎暢子

北山は標高 1000m 足らずの山々が連なり山深く広大な山域で、今も美しい自然が残っている。そんな北山探訪の山行に、3月に新入会してから初めて参加した。行先は品谷山・廃村八丁・卒塔婆山だ。ずっと前から行きたいと思っていた憧れの地だったので楽しみにしていた。初参加という緊張と不安もあった。待ち合わせの堅田駅 (7:00) でリーダーが笑顔で迎えてくださり、また坊村 (7:30) で合流したサブリーダーが、たくさん話しかけてくださったお陰で不安は空のかなたに飛んで行き、登山口である広河原菅原まではワクワクしかなかった。

菅原バス停横に駐車 (8:15)。お天気は曇りで昼からは雨の予想だったが、空は明るくてヒンヤリした山里の空気が気持ちよかった。支度をして出発 (8:30)。静かな山里と思いきや、林業のトラックが忙しそうに往来し、切り出した丸太をガンガン運んでいた。その横を通り過ぎ林道を進むとやっと静かになり、ダンノ峠の尾根コースへと取りついた。道は少し急だが歩きやすく、「あっ、あれはコシアブラ!」「オホノキの花も咲いている」「地面の葉っぱはイワウチワかな?」なんて森の植物の観察をしながらダンノ峠に到着 (9:45) した。それまでの植林主体の森とはうって変わって、ブナやミズナラといった広葉樹の森となり、その美しさに感嘆の声を上げた。谷からの風も心地よい。緑のきれいな森の空気を体に取り込みたくて何度も深呼吸をした。「北山らしい森で素晴らしい」とみんな感激した。

ダンノ峠から佐々里峠への分岐 (C860) までは中央分水嶺を歩く。最近、『中央分水嶺を旅する』という本を読んで、すっかり魅了されてしまい、いつかは全部歩きたいなどと叶いそうにない夢を見ているので、そ



品谷山への尾根を行く

の一部を歩くなんて感動的!! と一人で喜んでた。佐々里峠への分岐から品谷山への稜線へと進む。ところどころでサワフタギが咲いていた。視界の開けた場所からは比叡山、愛宕山が見え、北山がその間にあるということがよく分かった。やがて二等三角点のある品谷山に到着 (11:15)。三角点には点の記という戸籍のようなものがあることを教えてもらい興味を持った。

品谷山を後に廃村八丁を目指し、品谷峠からスモモ谷へと降りていく。途中ブナの巨木や、コロボックルが住んでいそうなスギの老木が目を楽しませてくれた。スモモ谷に入ると倒木が多く、少し歩きにくかったが時間通りに廃村八丁の入り口に到着 (12:45) した。写真でよく見た三角の小屋は健在で、こんな山奥に村があったなんて信じられない。そこは本当に異空間で、丁寧に積まれた石垣や炭焼き跡、壊れた祠や神社の跡、廃村八丁と定められた石碑やお墓。当時の村人に思いを馳せ、「八丁の川は涙で流れている」という壁の詩を目にしてとても切なくなった。調べてみると八丁村は600年もの歴史があるらしい。子孫はいらっしゃるのかな? など余計なお世話だけど、お参りされていないであろうお墓のことを思った。廃村を過ぎると弱い雨が降ってきた。ゆるやかに沢を登り、ソトバ峠に到着 (14:00)。昔話の世界にいたのに、急に普通の道路 (丹波広域基幹林道) が出てきてタイムスリップしたかのよう。中央分水嶺上に位置するソトバ山へは林道の切通の横から尾根に取りつき、春にはイワウチワがたくさん咲きそうな踏跡を進む。やがて三等三角点のある静かなピークに到着 (14:30) する。

いよいよ下山だ。林道を北東に進み、衣懸坂分岐からオリ谷へ向かう。これがまたとんでもない道だった。倒木で荒れた道は極めて不明瞭で高い読図力が求められた。リーダーの的確なルートファインディングのもと、何度も渡渉、木を跨ぐ・潜る・乗り越える、といったアスレチックのような道を迷うことなく進み、明るいうちに笑顔で広河原菅原に下山 (17:00) できた。途



卒塔婆山山頂にて

中で地図を見て、思いのほか進んでいないことを知ったときは衝撃的だったが、林道に出たときの安心感と嬉しさは格別だった。

距離にして14kmほど、9時間余りの山行で美しい森を堪能し、廃村でノスタルジックな気持ちになり、読図とアスレチックを楽しむ……。盛りだくさんで充実した1日だった。思い出に残る山行になること間違いなしだ。ご一緒させていただき本当にありがとうございました。

実施日：2023年6月6日 (火)

参加者：笠谷 茂 (L)、竹下節子 (SL)、矢野達子、瀬崎暢子

例会 健幸登山教室 2023-4

金毘羅山ロッククライミング トレーニング

矢野達子

6月18日 (日) 朝8時30分、金毘羅山麓の民家の駐車場に集合。日曜日なので、駐車場がいっぱいにならない前にと8時前に駐車場に到着する。8時を過ぎると車がどんどん入ってくる。あっという間に駐車場はいっぱいになる。天気が良いのでクライミング日和である。8時30分の集合時間に、9名が集合した。まずは自己紹介。初めてお会いする方もおられ、少し緊張しながら挨拶を交わす。

リーダーの松下さんからプリントをもらう。そのプリントには、当日、学ぶこと、理解することが書かれている。基本的なロッククライミングトレーニングで習得することが列記されている。

体調チェック、爪チェック、持ち物チェック、服装

チェック、ロープワーク：ロープの種類、ロープ結び（ボウラインノット、クローブヒッチ、ムンターヒッチ、フィギュアエイト・フォロースルー、フィギュアエイト・オン・ア・バイト、バント）、セルフビレイ（自己安全確保）。

準備を整えて、Y懸尾根の取り付けまで歩く。

そこで、グループ分けをしてロープワーク、結びの練習をする。まずはボウラインノット。ノットというのは結び目ということだそう。自分の体にロープ巻き付けてボウラインノットを練習する。それができたら次は、木の枝などの支点に結ぶ。目をつむっても結べるようになるまで練習するとよいそう。次にフィギュアエイト・フォロースルーを練習する。

そして、ハーネスを穿いてフィギュアエイト・フォロースルーを結び、登る準備をする。岩場を三点支持で登る。また、下る練習をする。足はフラットにつま先をまっすぐに置くのがよいそう。10m程の岩場を登る、下るの練習を繰り返した。

次に皆でY懸尾根を登っていく。トップの松下征悟さんが支点を作ってロープを下ろされる。ロープをハーネスにフィギュアエイト・フォロースルーで結び「登ります」と声を掛けて登っていく。支点まで登るとセルフビレイを取り、「セルフビレイ取りました」と声を掛ける。お互いが見えなくなる箇所もあるので、お互い声を掛け合いながら、登っていく。それを3回ぐらい繰り返した。途中メンバーがそろったので昼休憩をとる。そして、Y懸の頭まで登る。

Y懸の頭まで全員が登り、そこで、懸垂下降の練習をする。残置されている支点、ハーケンを使わずにロープを大きな岩に3周しっかり巻いてフィギュアエイト・フォロースルーで結び支点を作られた。そしてエイト環を使って下降練習をした。懸垂下降はちょっとどきどきしたけど面白かった。垂直の岩の壁を歩きたい

で楽しかった。それを終えてY懸谷を下山した。その後、京都一周トレイル近くにある山小屋をみんなで見学に行き解散した。

金毘羅山岩場練習が終了して、リーダーの松下さんが「これでみんな槍も剣も穂高も行ける！」と言われていたので、是非挑戦したいと思った。そして、支部だよりNo.151が届き、西穂高岳は金毘羅岩場事前トレーニング参加者のみ！と書いてあったので、西穂高岳山行に参加したいと思います。北アルプスの西穂高岳に登る日が楽しみです。

実施日：2023年6月18日

指導者：松下征文（L）、村上 正（SL）

駒井治雄（途中まで）、土井文雄、松下征悟

受講者：藍野裕之、上野揚子、藤綱珠代、矢野達子



懸垂下降



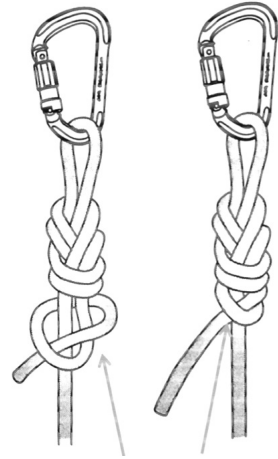
ボウラインノット



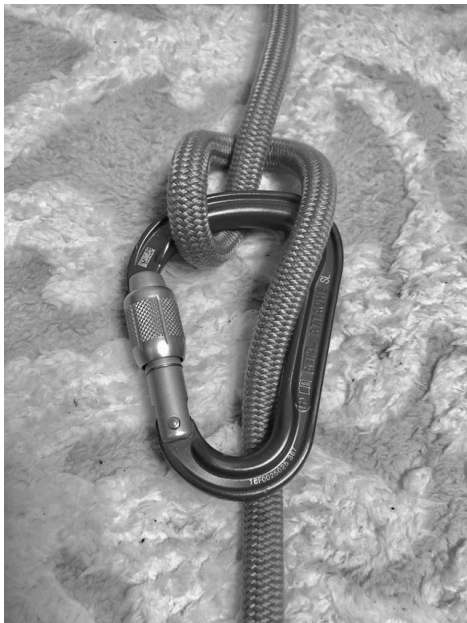
Y懸尾根の登り



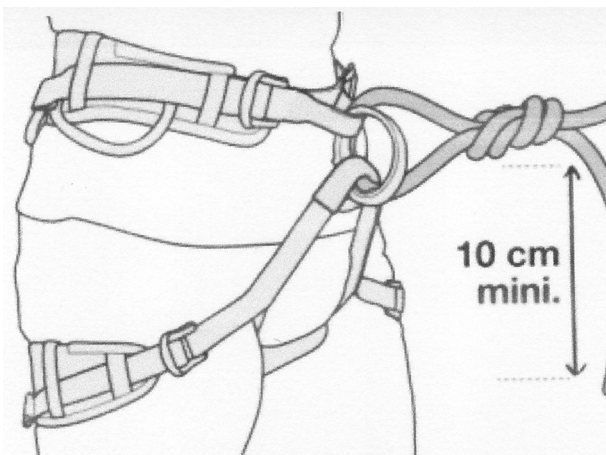
グローブヒッチ



フィギアエイト・フォロースルー



ムンターヒッチ



ハーネスとロープの接続

例会

大文字山納涼山行

笠谷 茂

毎年7月最終土曜日に実施している大文字山納涼山行。今年は16名が集い、“夕暮れの古都を眼下に納涼のひと時”を過ごした。

近畿地方は気象庁から7月20日頃に梅雨が明けたと発表があり、それ以降の暑さは強烈。京都市では7月21日から連日最高気温が35度を超える猛暑日、26日以降は連日38度を超える酷暑となった。7月29日17時30分、銀閣寺前は閉門と共に観光客も少なくなり喧騒は去り静寂が戻りつつあったが暑さは居座っていた。

18時30分、全メンバーが西日を受けまだ暑さを感じる火床に揃う。目立った積乱雲もなく展望は良好で大阪の高層ビル群も良く見える。素晴らしい暮れゆく景色を見ながらそれぞれ持参した食料・飲料で歓談。納涼感が増してくる。愛宕山に夕日が沈み、街並みには明かりが増えてくる。日が沈み改めて涼しさを実感する。食事がひと段落したあと参加者に自己紹介を頂く。加えて話して頂いた印象に残った山の話で盛り上がる。更に、駒井さんが準備してくださった歌集をもとに山の歌の合唱もあり、参加者の親睦を深めた。

20時30分、火床を後に下山開始。下るほどに暑さが増し、汗がにじみ出てくる。21時15分、夕刻よりは幾分暑さが落ち着いた静かな銀閣寺前で解散。

来年もより多くの方と納涼のひと時を持てることを楽しみにしている。

実施日：2023年7月29日（土）

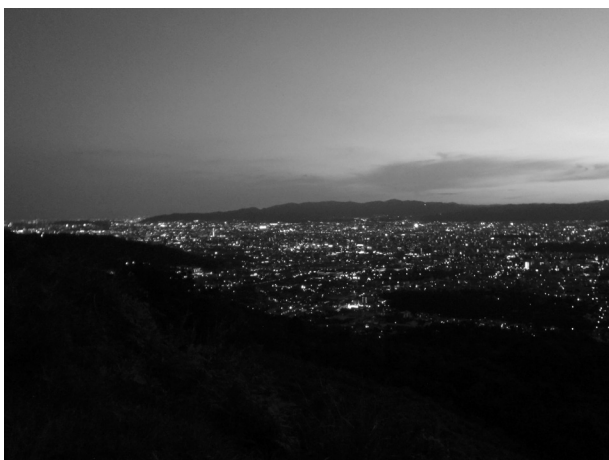
参加者：笠谷 茂、駒井治雄、関本俊雄、藤網珠代、
松下征文、真名子栄一、上野陽子
（友の会）梅影義明、梅影順子、近藤憲司
（一般）6名



日没前（南西方向の展望）



日没直前



納涼感が増す日没後

個人山行

比良と比叡

成田政隆

比良比叡トレイル、東海自然歩道など、身近な大津の山々を時間の合間に少しずつ回っている。今年の春からは、比良（霊仙山～堂満岳）、比叡（日吉大社～崇福寺跡）、比良（イクワタ峠～蛇谷ヶ峰）と登った。

①比良（霊仙山～堂満岳）

妻に伊香立上龍華町まで送ってもらい、還来神社の先から山に入った。途中広い林道に入ったために、引き返すものの、霊仙山に到着。山頂で小休止をしようとしたものの、蜂が周りに飛んでいたため、早めに移動。慌てていたために、誤って栗原方面に進んでいることに気づき、引き返し、権現山に到着。景色を堪能しながら、今度こそ小休止。

その後、ホッケ山、小女郎峠を経て、蓬萊山を臨む。ちょうどパラグライダーの方々が飛び立っている中、蓬萊山に到着。びわ湖バレイの観光客も多数おられ、蓬萊山の山頂におられた方としばし歓談。睡蓮の花々を眺めながら、打見山から木戸峠を経て、比良岳へ。さらにどんどんと進み烏谷山、荒川峠、南比良峠を経て堂満岳に到着。疲れも出てきていたので、携帯食料をゆっくりと食べ、下山へ。歩いても歩いても進んでいる感じがない中、なんとか比良駅に到着し、帰路へ。

②比叡（ケーブル坂本駅～崇福寺跡）

気が向いたらよく行くルート。自宅の唐崎から、無理するとあとで膝が痛くなるために、ゆっくりランニングし、県道316号比叡山線である本坂へ。登り始めると、以前に比べ、丸太による整備がだいぶ進んでいた。途中外国人ともすれ違うなど、人通りも若干増えているように感じた。延暦寺を越え、弁天堂から東海自然歩道へ。途中、災害による危険個所に鉄製の階段をつけるなどの対応がなされていたが、崇福寺跡に向けては崩落による危険との告知がまだなされていた。実際に現地に行くと、すでに修繕に向けて動き出しており、安全に気を付けながら、状況を確認した。被害が出てから1年半以上経過しており、1日も早く多くの方が通行できるルートになればと感じた。

③比良（イクワタ峠～蛇谷ヶ峰）

今回は知人とともに、3名で登る。朽木栃生から入山し、イクワタ峠まで一気に登り、小休止。笹峠をへて地蔵山へ、さらに地蔵峠を越えていくと、滋賀県造林公社の伐採事業地に入った。登山道が分かりにくかったため、しばらく整備された林道を進み、途中でルートを外れていることに気づき、引き返し登山道に戻る。

横谷峠、荒谷峠を進んでいく中、多くの高校生とすれ違う。新入生が先輩たちに先導されながら登っている姿が微笑ましかった。そして、蛇谷ヶ峰に到着すると、多くの登山客が休憩をしていた。大阪から1泊で比良山系を縦走されている方ともお話ができた。しばらく景色を楽しみ、グリーンパーク思い出の森へ下山した。

全体を通して、大津市域と比べると高島市域の方が道標の数が多く、わかりやすかったように感じた。また滋賀県造林公社をはじめ、森林の伐採事業が進められており、林道整備により登山道が分かりにくくなっている。霊仙山もこれから伐採事業に入るとのことだが、迂回路の設置を含め、現在協議をしてもらっている。比良比叡をはじめ、滋賀の山々は場所によって琵琶湖の見え方が変わる。いろんな見え方がするのも大きな魅力である。その魅力を感じてもらい、楽しんでもらうためには、行政も含め、多くの方々の協力は大切である。特に遭難による損失は計り知れない。そうならない為にも、登山にかかる様々な施策の推進の必要性をあらためて感じた。

実施日：2023年5月4日（水）霊仙山～堂満岳

5月20日（土）比叡山

5月27日（土）蛇谷ヶ峰

個人山行

大台ヶ原～蒸籠峠(ブッシュマン)

米森昌一

急遽、決まった遠征。ゴールデンウィークに雪彦山(地蔵岳東稜ノーマルルート)に行くことが決まったのも確か2、3日前のことだった。今回も3日前からトントン拍子に計画が進み、前回と同じ4人で遠征することとなった。

問題は天候だ。1年366日、雨が降ると言われる大台ヶ原だが、天気予報は曇り。天気は良くなっていくだろうと淡い期待を抱いて3人のメンバーは乗り合わせて前泊し、1人は仕事を終えてから車中泊することにした。

クライミング当日、道の駅「杉の湯 川上」で合流し、ビジターセンターへ向かう。予報通り天候は曇りだ。しかしながら、ビジターセンターに到着すると、雨こそ降っていないものの駐車場はシットリ濡れている。嫌な予感がするがメンバーのやる気は十分だ。準備を済ませ、まずは尾鷲辻～牛石ヶ原を目指す。

時間に余裕があるので、大蛇峠に寄り道をして本日のルートを確認。偵察を終え、悪いと噂のブッシュマ

ンへのアプローチ道を探す。最初は笹藪の踏み跡を辿って降りて行くが、しばらくするとガレガレ岩場に。不安定な石・岩が多く落石に神経を使う。初見であり、さらに雨という条件が重なり、事前情報で得ていた15分では取り付きに到着できなかった。

それでも何とか本日登攀予定のブッシュマン取り付きに到着。1ピッチ目は完全に濡れている。1ピッチ目はいつも濡れていると聞くのでそれほど落胆はない。なかったと思う。私自身は、この先乾いている。乾いてくるだろうと勝手な期待をしつつ準備を進めた。今日も、須藤～三木、松下～米森でロープを繋ぐ。

須藤Lの「自分が最初に行くで」との力強いお言葉で登攀スタート。濡れているのに、安定した登りだ。次いで、パートナーの松下さんがリードを終え、いよいよ私の番だ。こんなに濡れたクライミングは初めてだ。兎に角必死にA0を駆使して何とか1ピッチ目を終える。セカンドでも心臓が縮み上がる思いであったが、ここをリードできる2人には感嘆しかない。

さて、期待の2ピッチ目も残念ながらしっかりと濡れている。風もないし日も差さないで、雨こそ降っていないが乾く要素がないのだ。更にすしガスも濃くなってきた気がする。ビレイの足下に水が滴り冷えが加速していく。何とか3ピッチ目を終えたが、ここで撤退判断。

初めての太台ヶ原は、ずぶ濡れのアルパインクライミングで、残念ながら敗退となったが、アルパインクライミングの緊張感、悪条件での判断、撤退判断・タイミングなどと貴重な経験を得ることが出来た。次回は好天を引き当て再戦することを固く誓い合い帰路に着いた。

実施日：令和5年5月27日（土）

参加者：須藤邦裕（L）、松下征悟

（友の会）米森昌一

（一般）三木千津子

個人山行

錫杖岳烏帽子岩前衛フェース

左方カンテルルート

荒木龍太郎

錫杖岳は穂高岳の岐阜県側登山口である新穂高温泉に聳える山で、僧侶が持つ錫杖の頭に山体が似ていることから名付けられたとされている。標高は2000m程度でアルペン的な雰囲気が少ないが、高低差が300mを超える大岩壁によって構成されており、昔からクラ

イミングの対象とされてきた。特に近年では、人工登攀ルートからフリークライミングルートとしての転換がなされており、どのルートもルート上の人工支点が排除されナチュラルプロテクション（岩の隙間に入れ込む確保器具）を用いて登るものが殆どとなっている。そのため、クライミングとしては厳しいものも多く、穂高の峰々を眺めながら登攀することが出来るそのロケーションから多くのクライマーを引き付けている。

今回、私の職場の先輩かつ山友達の方と代表的ルートである前衛フェース左方カンテルルートに登ることとなった。

6月16日、前日に奥飛騨温泉郷に入り、来たる登攀に向け早めの車中泊。

66 登山口へ（6：00）。ここから錫杖岳取り付きまで2時間30分の樹林帯歩きとなる。上がる息を耐えながら登ると、木々の間から錫杖岳の荘厳な山体が覗き始める。早る心を抑え、登山道を外れさらに40分。左方カンテルルートの取り付きに到着。ハーネス類を装着し登攀開始。（8：30）

1、2ピッチ目（ルンゼ～フェースのⅢ～Ⅳ級）は同行者がリード、しっかり身体を温めていく。3、4ピッチ目（ハング越えからフェース～チムニーのⅣ～Ⅴ級の下部核心）は荒木がリード。このルートは先述の通り、残置支点が無いいため数少ない岩の隙間を見つけカム、



クリヤ谷より望む錫杖岳烏帽子岩前衛フェース

ナッツをセットしていく。緊張が高まるが日頃のトレーニングのおかげかスムーズに越えることが出来た。

そうこうしているうちに、ルート上の最大核心部へ。被った凹角から大チムニー、クラック（Ⅴ級+）は同行者がリード。テクニカルで難しいながらも高度感があり気持ちのいいピッチだ。最終ピッチを越え、前衛フェースの頂上に向かおうとしたが、急激に気温が上昇したこともあり、2人してバテてしまい、懸垂下降で下山。（13：00）下降ルートは注文の多い料理店ルートより降りる。装備を整え、同じくクリヤ谷を下山し、登山口には16：00に到着した。

今回、暑さと緊張にやられてしまったが、総合力がさらに上がった気持ちのいいクライミングだったと感じた。さらに安全技術を向上させ、この夏は北岳バットレス第4尾根と滝谷ドーム中央稜に挑みたい。

実施日：2023年6月17日（土）

参加者：荒木龍太郎

（会員外）田中 隆

個人山行

明神岳主稜 (1)CLの報告

村上 正

若い頃と言っても20代だから40年以上前の話になる。4月末からのゴールデンウィークに掛けて、先輩とこの明神岳主稜を登っている。その2年ほど前には同先輩と北鎌尾根も登った。岩稜はある程度雪がある方が登りやすい場合もある。その後それらの経験を基に3000mの雪の岩稜を登って来たが60代になった頃、今までに登ってきた雪稜を無雪期に登り返そうと思いつき立ち実行している。そのひとつが今回の明神岳主稜である。

上高地を襲った地震とコロナの自粛で5年の歳月を無駄に過ごした。私も体力低下を実感せざるを得ない年齢になり、あと何本登れるのかと思案している頃であった。そこで今回の明神から出来るだけ経験の伝承と若手の育成を兼ねたものにしよう、本会員からめぼしいメンバーを募った次第である。

明神岳主稜は岳沢道のプレート No.7 から一旦取り付くと、帰りの岳沢か奥又白谷までは水の入手は不可能である。1泊2日で行くとなると4lから5lの水が必要となり、ひとり当たりの総重量を13kg以内に抑えるには登攀用具と水を除いた個人装備は、ザック・食料込みで4kg以内に抑える必要がある。悩みの種はそこ



明神岳から梓川、常念岳を眺める

にある。この岩稜は3000m峰の中では中級レベルに相当するが、高齢者と未経験者が行く荷物は軽くしたい。No.7から一般道を離れると市販の地図からは赤線が消える。最初のピークP5まで一気に1000m程を登る。樹林帯を抜けてハイマツ帯に入ると傾斜は急を増し、膝辺りまでの高さのハイマツは厄介で、枝は細く体重を支えるには弱く跨ぐには高すぎて足の疲れは増す一方である。この尾根と前明神沢の上部が出合う辺りから垂直に近い岩場が出始める。残置ロープを目印に登り、開け始めた稜線を辿ればP5は近い。

3000m級の藪漕ぎはハイマツ漕ぎでもある。名乗りをあげて同行した会員は松下征悟君だ。前日にふたりでJAC山研（上高地山岳研究所）から徳沢まで歩き、明神岳主稜を眺めて裏表の概要を共有していたので、松下君にP5・4・3・2から主峰にかけてルート・ファインディングを兼ねたリードを任せた。P2垂壁の2ピッチ50m懸垂下降、支点の弱そうな所にハーケンを打ち足す。何処の岩場でも同じだが、古いハーケンに取り付けられた捨て縄を信用するしかないのだが、信用できないもどかしさがある。着地して初めて捨て縄に感謝し有難さを感じる。以後、前穂高まで幾つかのピークを越えるのだが、疲れた身体と不安定なガレ場に気を使いながらふたりでルート・ファインディングを行い進む。私のスピードは上がらず荷物は松下君に委ねる。この時点で予定より2時間以上オーバーしていたと思う。前穂高の登りをスルーして、奥明神沢のコルからガレ場を下ろうかと考えたが、本来の目的から外れるのでピークを目指すことにした。上記、構想から実施に至った経緯の報告である。

尚、次の松下君の山行報告を読んで頂き、私の報告と併せて頂ければこの岩稜の多様な技術と美しさを知って頂けると想像する。



年長の会員が若い会員に経験を伝えた

個人山行

明神岳主稜 (2)山行報告

松下征悟

昨年9月、村上正さんが明神岳主稜のメンバーを募っていた。北アルプスのバリエーションルート、チャレンジできるならやってみたく手を挙げた。アイゼンが要らず、岩稜の残雪で水が得られる6月中旬から7月初旬までの期間で計画した。しかし、岩稜の残雪が期待できなければ、ひとり5ℓの水を担ぐことになる。

7月6日、昼前に上高地に到着。青空と山々の美しい景色に心が躍る。JAC山研に荷物を置き、明神岳5峰(P5)から前穂高の稜線を調べに地形図を見ながら徳沢まで歩いた。山研に戻り、行程を再確認しているところで、天気予報が悪い方になってきた。7日の

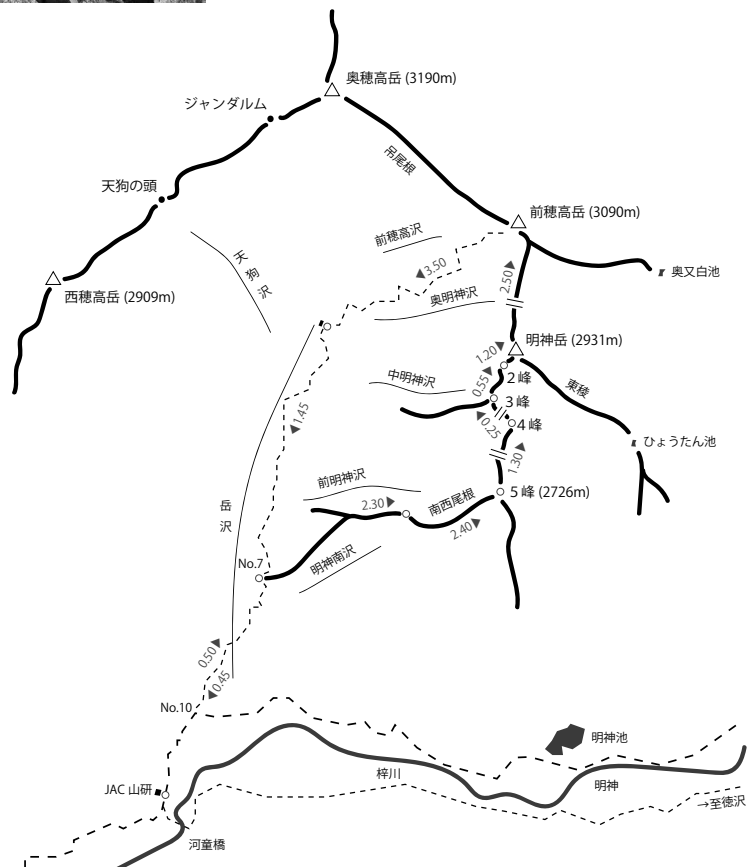
夜から雨になりそうだ。出発時間を早め、夕暮れに山研に戻る計画に変更。荷物を少しでも軽くするために、水や食料も最小限に減らした。

7月7日、朝4時20分、夜明けとともに出発。岳沢No.7の標識から5峰南西尾根に入る。樹林帯を抜け、岩稜と開けていく眺望に気持ちが高まる。ハイマツの藪漕ぎが歩きにくい、かわいい花に励まされながら5峰を目指す。出発から6時間、青空と360度の大パノ

ラマの5峰に到着。5峰のシンボルのピッケルと写真を撮り4峰（P4）を目指す。高度感のある稜線を進み4峰に立つと、明神岳3・2・1峰（P3・2・1）が目の前に並ぶ。「かっこいい!!」。写真を撮って景色を楽しみ3峰を目指す。3峰は、芯が剥き出しになったフィックスロープを目印に西側から巻く。2峰の懸垂ポイントには、何重にも重なった残置ロープがある。信用できるロープかどうか、支点のハーケンは大丈夫か、村上



ザイルを結びあったふたり



今回のルートと山域の概念図

さんの経験を聞く。懸垂下降は、日頃の支部の先輩方との岩場での練習の甲斐あって迷うことなくセットして下降できた。ガレガレの斜面を登り、14時40分、1峰の山頂に立つ。前穂高岳、明神岳東稜、歩いてきた稜線を振り返る。あとは、奥明神沢のコルに下りて前穂高に抜けるだけと思っていたが、本当に大変なのはここからだった。

1峰からのクライムダウン、不明瞭なうえ崩れて途切れている踏み跡、ルートファインディングに時間がかかる。雨水の流れた跡までも踏み跡に見えてくる。疲労と時間が気持ちを焦らせる。ルートの判断に迷った時の村上さんのアドバイスが心強い。気持ちを落ち着けて、目指す前穂高岳に向け歩を進める。17時30分、前穂高岳山頂に立つ。35年前に家族と登った思い出の場所だ。ここからは一般ルートを下山する。しかし、思いのほか、道が悪く、濡れて滑りやすい。日没後は、ヘッドライト頼りの下山でさらに気が抜けない。ルートロスしないように注意しながら岳沢を下る。天気は最後まで味方してくれた。23時30分、本降りの雨が降り始める前に山研に戻ることができた。

装備の選択、要所要所での村上さんの経験談、ガレ場でのルートファインディング、学びが多く充実した19時間の山行だった。灯りをつけて待っていてくださった山研の山田さんに感謝を申し上げます。

実施日：2023年7月6日（木）～8日（土）

参加者：村上 正（CL）、松下征悟

「第36回東北・北海道地区集会 （青森支部30周年）」報告

伊原哲士

支部副支部長の幣内規男さんと私とで八戸市で開催される「第36回東北・北海道地区集会（青森支部30周年）」に参加した。会場の八戸市は三沢空港に近い。但し、関西方面からは伊丹空港から三沢空港は一往復しかない。開催時間に間に合いそうにないので、八戸市に6月30日（金）に前泊した。

時間があるので「温泉マニア」の幣内さんと長寿温泉に行った。浴場は真ん中に大きな湯船があり、洗い場はその周りがある。奥には5から6人は入れる大きな青森ヒバの一本づくりの湯船が鎮座している。清潔感あふれる温泉で、お湯も熱めと温めの2種類が楽しめる。

温泉の帰路は、「みろく横町」という八戸の名産で呑める居酒屋横町に寄った。何故か、八戸の「みろく横町」のネパール料理の店で呑んでしまった。ネパール人のお姉さんと目が合い、「ナマステー」と挨拶してしまったのが運の尽き。居着いてしまった。ホテルへの帰り、酔っ払った幣内さんは叫ぶ。「魚の美味しい八戸で、何でネパール料理で呑んだんや」。私は「わからない」としか答えられなかった。

翌7月1日（土）は、「第36回東北・北海道地区集会（青森支部30周年）」だが、14時に受付なので、青森鉄道小川原駅から徒歩で1分の所にある姉戸川温泉に行った。幣内さん曰く、「朝早くから開いている、朝食は現地で摂ろう」と7時に現地に着いた。開館は朝9時だった。仕方ないので、近くの小川原湖の方向へ散策した。土地勘がなく方向を失った。漂泊して小川原湖にたどり着けなかった。元の道に戻りクタクタになる頃に姉戸川温泉に着いた。9時だった。

姉戸川温泉の入浴料は250円だった。中へ入ると上から伸びるパイプから温泉がドバドバと溢れ落ちている。アルカリ泉の湯温は39度。いつまでも浸かっている。

八戸市内で朝食と昼食兼用の食事を摂り、「第36回東北・北海道地区集会（青森支部30周年）」の会場に行った。

15時に日本山岳会青森支部30周年記念式典。古くから青森支部設立の声はあったが、その機会が完熟するに至らなかった。1982年に長野で開催された第1回支部間交流会で佐々保雄会長（当時）から「青森支部設立を進め、東北地域の支部ブロック会を開きたい」旨の発言があった。紆余曲折を経て青森支部は1993年に設立された。

記念講演は15時30分で開催された。内容は「八戸の風土と歴史」。副題は「縄文・古代（戸の話）・根城南部氏・八戸藩・種差など」であった。講演は元八戸市まちづくり文化観光部長・元八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館館長の古館光治氏。この講演で、青森は津軽地方と南部地方に分かれ、文化も風土も自然も違う二つの地域であることを初めて知った。

記念講演の後は、懇親会。懐かしい山仲間と久闊を叙した。新しく日本山岳会の会長に就任した橋本しをり氏も来ていた。来賓挨拶で「私と日本山岳会の出会いは東京女子医科大学の山岳部に在籍していた学生の頃にまで遡ります。当時、日本山岳会学生部の部長をされていた早稲田大学山岳部の竹中昇さん」と懐かしい名前が出てきた。竹中昇さんは1981年の植村直己さんの「冬季エベレスト登山隊」に参加して亡くなった。関西の人で、当時の先鋭的な山岳グループ「関西学生山岳連盟OBの会」に冬季エベレストが終わると加わ



「第36回東北・北海道地区集会（青森支部30周年）」
青森県八戸市



「下北半島探勝会」青森県下北半島

ると言っていた。翌年の1982年に奈良市富雄に皆で墓参りに行きご家族とその若い死を悲しんだのを覚えている。

7月2日（日）は記念山行とハイキング。山行は階上岳（740m）。一等三角点本点があり別名「臥牛山」と呼ばれる。なだらかな山で八戸市街が一望できる。ハイキングは、燕島・種差海岸散策。「花の渚」とも呼ばれ海拔0mから高山植物が楽しめる場所だ。京都・滋賀組はハイキングに参加した。ニッコウキスゲ、スカシユリなど種差海岸は花の宝庫だった。夏の長距離の海岸線歩行は少しきつかった。

これで「第36回東北・北海道地区集会（青森支部30周年）」の日程を終えた。

この後、少しおまけがあり引き続き残った。折角、遠いところから青森まで来たのだから、青森支部の有志の計らいで「下北半島探勝会」をすることになった。

東北・北海道地区集会参加の帰路、解散地から下北半島に向けて貸し切りマイクロバスでむつ市に移動。途中、釜臥山に寄った。むつ市内泊。

7月3日（月）は「大尽山登山」と「尻屋岬の寒立馬」などの観光組に分かれて行動した。恐山で合流して観光。下風呂温泉泊。

7月4日（火）は帰路の飛行機の関係で、下風呂温泉から路線バス、鉄道を乗り継いで三沢空港から伊丹空港へ飛び、帰宅した。

実施日：2023年7月1日（土）～4日（火）

参加者：伊原哲士、幣内規男、全体23名

図 書 紹 介

『彼女たちの山～平成の時代、女性はどう山を登ったか』（柏澄子）

藤網 珠代

この著書に登場する彼女たちは好きをすべて努力に変えて、人生をしっかりと生きている。

自分自身に足りないものをきちんと見つめて理解している。様々な山行や職業、または大会を経験しながら自分自身の人生を生きている。全員の共通点は女性であること。自分の好きを信じて何事もやると決めたら目標にむかって努力を惜しまない。山野井妙子、田部井淳子、谷口けい、野口啓代、遠藤由加。その中でもすごいと思ったのは山野井妙子が両手両足の指のほとんどを失いながらも家事をこなし包丁を握り料理をするところ。そしてこう述べている。

「ちゃんと料理をしたいから。箸でご飯を食べたいから箸も使った。箸でないとおいしくないでしょう。料理や食事は割と簡単にできるようになったけれど、なかなかできなかったのは靴紐を結ぶこと。時間はいっば



山と溪谷社 2023年3月 1870円

いあるからあせる必要はないと思った。ちゃんと結べたときは、やったって思った」

なんてきちんと日常を大切にしている人なんだろう。そして努力を惜しまない人なんだろう。今を真っ直ぐ見つめて、今出来ることを努力する大切さに気づく事のできる一冊です。

『青いケシの国』

(フランク・キングドン=ウォード)

藍野裕之

NHKの朝ドラ「らんまん」の主人公の榎野万太郎は植物学者の牧野富太郎(1862～1957)がモデルなのはいまや多くの人を知る。牧野が学歴とは無縁で生涯を植物分類学と植物画に捧げたというのは疑いない。ただ、東京帝国大学教授の権威を盾にした悪漢ぶりは、学界から誇張が過ぎるとの声も聞こえてくる。先日ふとテレビを点けたら、「僕のプラント・ハンターにならないか」と教授が万太郎に提案するシーンだった。

プラント・ハンターとは、人跡未踏の地まで分け入って珍奇植物、希少植物をハンティングする命知らずのことだ。朝ドラでは完全に学者の手下という筋書きである。勧めを断る万太郎に教授は、「この先はないぞ」と脅す。研究室で奥地からの採集物を待つ学者は「アームチェア・ナチュラリスト(安楽椅子の博物学者)」といわれた。業績の横取りもあったのだろう。そこを「らんまん」は誇張した。何しろ牧野が若かった時代の日本は、まだまだ植物学の荣誉である新種発見の可能性が残っていたのである。まあ、いい。それより覚えておきたいのは、牧野の植物誌が、初期の日本山岳会会員誌『山岳』でも発表されたことだ。もちろん会員だった。ある調べによれば、牧野は植物調査のため伊吹山(1377m)に8回も登ったという。

そんな牧野富太郎とともに同時代を生きたイギリス人を思い出した。こちらは正真正銘のプラント・ハンターだ。フランク・キングドン=ウォード(1885～1958)である。イギリスは19世紀以来の探検でヒマラヤ地域での新種発見もかなり進めていた。ウォードを後押ししたのは爆発的な園芸の流行だった。ケンブリッジ大学の植物学教授を父に、自身も同じ大学で自然科学を学び、上海で教職にまで就いた。しかしウォードは安定を捨て、奥地で採集した植物や植物の種を園芸業者に売りながら探検を続けたのである。

生涯じつに24回もの探検を行なった。旅に出るとい

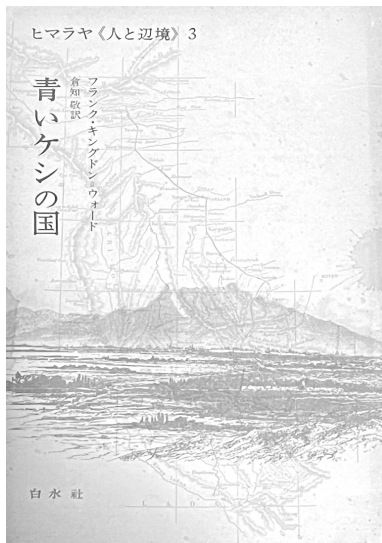
うより旅に生きた。探検は長いときには2年を超えたのだ。中国の雲南がもっとも多かった。その延長で四川、チベット、ビルマ(現在のミャンマー)北部、中南部、アッサム(現在はインド領)、そして最後の探検はセイロン(現在のスリランカ)だった。植物採集とともに、空白地帯に踏み込み概念図を仕上げ地理学を前進させた。イギリスには日本山岳会が範とした山岳会とは別に、探検の学会として王立地理学協会がある。エベレスト初登頂の計画は両方の団体が協力して実現させたのだ。ウォードは探検家として評価され、協会のゴールドメダル(最高賞)を受賞している。

著作の邦訳には、『植物巡礼～プラント・ハンターの回想』や『ツアンポー峡谷の謎』(ともに岩波文庫)もあるが、何といても『青いケシの国』(白水社「ヒマラヤ〈人と辺境〉3」)だ。1911年に行なったビルマから雲南を踏破した探検記録である。ヒマラヤ地域の3000mを超えようという高地にしか生息しない青い花を咲かせる珍しいケシ。他の地域の種はすでにイギリスに届けたものがいたが、中国産をヨーロッパに持ち帰ったものは誰もいなかった。それを探し求める記録だが、風景や人々の暮らしの描写は詩的で、難所踏破の記述は詳細だ。そして、いよいよ青いケシ発見のときには大興奮する。動と静、興奮と冷静との絶妙な配分により、記録は記録文学に変わるのである。

20世紀初頭、辛亥革命の最中の中国。旅は上海から始まる。清朝が崩れ始め、共和制へ向かう。政変を逃れるように船でビルマへ渡る。そして、南から雲南に入っていくのだ。道中で出会う少数民族の伝統的な暮らしが美しい。一人称の独白的な文章である。難題、難所を始末する様子は淡々とした筆運びゆえ、したたかな一匹狼の雰囲気醸し出される。それでいて悪漢との戦いなどない。ただひたすら「ヒマラヤン・ブルー」とも称される美しく可憐な、文字通りの高嶺の花を探すのである。ハリウッドのどんな冒険活劇も安っぽく見える高貴なロマンチズム。男心をそそる。

そんな名作を生んだ後、ウォードはツアンポー峡谷の踏破をやったのけた。ヒマラヤ山脈の北側に端を發するヤルツアンポーという名の川は、東へ東へと流れ、チベットを横断してナムチャバルワ(7782m)の東で大きく屈曲して南下。ヒマラヤ山脈の南側に出るとブラマプトラと名を変えて一転して西へ流れる。地図ではU字を横にした奇妙な形として目立つ。この川の大屈曲部がツアンポー峡谷で、とんでもない落差の谷にぶった切られたところがヒマラヤ山脈の東端。この説はかなり定説化していた。いまでもそうだ。しかし、ウォードは峡谷より東を「シノ(中国)・ヒマラヤ」と呼んだ。峡谷で山脈が分断されているとは、必ずしもいえない何かを掴んだのだ。

ウォードが波瀾の人生を閉じた直後、AACK（京都大学学士山岳会）でこの稀代のプラント・ハンターの後を継ぐかのような計画が持ち上がった。『青いケシの国』の舞台とも重なる中国国境に近いビルマ最北部のカカボラジ（5880m）を、ヒマラヤ山脈の一角と捉え、その初登頂と周辺の学術探検をしようというのである。ウォードが残した写真を見せ、「誰か行きたいものはないか」と提案者は問うた。真っ先に名乗りをあげたのが、若き日の我が支部の長老、顧問のひとりである齋藤惇生さんだ。ご本人の文章を引こう。



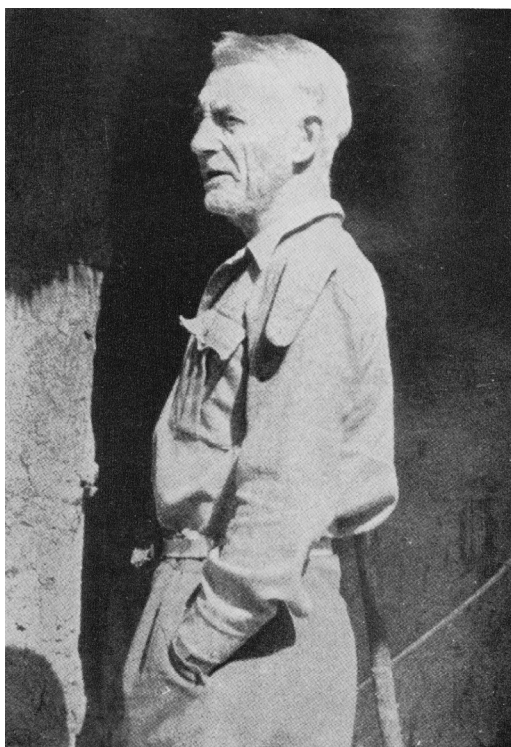
白水社 1975年8月 現在絶版。
図書館で探すか古書で入手

〈山容は素直に登りにくそうではなかった。私は登山としては少し物足りない気がした。しかし丁度そのころ研究の目途も立っていて、何となしにムズムズしていた。そして偶然に一カ月ほど前に、第二次世界大戦中のビルマ奥地での一兵士の得意な経験記録である『カチン族の首かご』を読んでビルマ奥地に興味を持ち始めていた。私はつかれたように手をあげた〉（「失われた山と探検」中央公論社「梅棹忠夫著作集」月報19）

残念ながら計画はビルマ政府から許可が出ず水の泡となった。



会員の浅原明男さん撮影の青いケシ。浅原さんはヒマラヤガイドでこの花を見るトレッキングの企画経験もある。支部で企画となれば心強い味方になってくれる



62歳のときのウォード



大阪鶴見緑地の咲くやこの花館では冷温室で毎年5月に開花する

行 事 案 内

- ◇ 山行への参加申込は、例会名、会員番号、氏名、年齢、電話番号等、緊急連絡先および山岳保険の加入・種類など必要事項を記入の上、メール、または FAX、郵送で。
- ◇ 「★マイカー分乗」の山行は参加者の自家用車利用を予定しています。ご協力をお願いします。
- ◇ 思わぬところで遭難事故が発生します。車両保険と同様、また、ご家族のためにも山岳保険の加入は登山者の常識です。会員各位のご理解をお願いいたします。

今西錦司レリーフの集い

実施日：2023年9月24日（日）
集 合：植物園北入口前 9時
内 容：京都・滋賀支部創立に尽力した今西錦司のレリーフを訪ね、清掃、補修作業を行います！ 場所は北山直谷です。
行 程：植物園北⇒中津川出合橋⇒滝谷峠分岐⇒今西錦司レリーフ⇒滝谷峠⇒中津川出合⇒植物園
地形図：1/25000 図「周山」「大原」
担当者：駒井治雄
申 込：9月15日

申 込：山行申込書をメールで10月20日迄
 ※日程、実施日等変更になることがあります。
 担当者へ確認をお願いします。

健幸登山教室 2023-10

実施日：2023年12月2日（土）
集 合：参加者打ち合わせ
目的地：リトル比良
地形図：1/25000 図「北小松」
山行の目安：体力3、技術2
担当者：松下征文
参加費：交通費

申 込：山行申込書をメールで11月15日迄
 ※日程、実施日等変更になることがあります。
 担当者へ確認をお願いします。

健幸登山教室 2023-8

実施日：2023年10月7日（土）～9日（月）
 ※登山者集中時は変更あり
集 合：参加者打ち合わせの上決定
目的地：唐松岳、会員対象
行 程：陀羅佛小屋＝第一ケルン→丸山→唐松岳（小屋泊）同ルート下山→帰宅
地形図：1/25000 図「白馬町」
山行の目安：体力3、技術2
担当者：松下征文
参加費：交通費、宿泊費
申 込：山行申込書をメールで9月22日迄
 ※参加者3名以上で実施
 ※日程、実施日等変更になることがあります。
 担当者へ確認をお願いします。

健幸登山教室 2023-11

実施日：2024年1月27日（土）
集 合：参加者打ち合わせ
目的地：赤坂山
内 容：わかん、スノーシューで登る
地形図：1/25000 図「駄口」
山行の目安：体力3、技術2
担当者：松下征文
参加費：交通費

申 込：山行申込書をメールで12月25日迄
 ※日程、実施日等変更になることがあります。
 担当者へ確認をお願いします。

健幸登山教室 2023-9

実施日：2023年11月11日（土）
集 合：参加者打ち合わせ
目的地：御在所山（御在所岳）1212m
地形図：1/25000 図「御在所山」
山行の目安：体力3、技術2
担当者：松下征文
参加費：交通費

テント泊山行

金剛堂山 (1650m)

実施日：2023年10月14日(土)～15日(日)
 集合：参加者に連絡
 時間：参加者に連絡
 内容：目的の山域・山名：富山県南砺市と富山市八尾市の境界に位置し、古来より修験道の名山である。前・中・奥金剛の3峰を有し、前金剛に一等三角点と祠がある。最高点は中金剛1650m。草原状の稜線からは、御岳・乗鞍・槍・穂高などの眺望を楽しむことができる。
 行程：14日(土)北陸自動車道⇒砺波IC⇒R156⇒R472⇒道の駅利賀⇒R229⇒栃谷登山口 テント設営・泊
 15日(日)栃谷登山口→△997.9m→・1021→・1346→・1451→前金剛山1637.9m→中金剛堂山1650m→往路下山
 地形図：1/25000 図「白木峰」
 実働：登り実働3時間程度、標高差約900m
 山行の目安：体力3、技術3
 担当者：田中昌二郎
 申込：9月30日(土)までに支部所定事項記入し、FAXまたはメールで担当者まで FAX：075-231-0241

写真サークル

実施日：2023年10月22日(日)
 集合：JR 堅田駅 7時
 目的地：おにゅう峠「紅葉の峰を感じる」
 行程：坊村から針畑川上流へ、朽木小入谷から峠へ
 運が良ければ雲海が見られますが、少し時間が遅いかも
 担当者：野村綾子
 申込：前日までに担当者へ

写真サークル

実施日：2023年12月3日(日)
 集合：阪急西京極駅8時
 目的地：京北町「伏条台杉群の大きさを感じる」
 行程：高雄から周山街道→ウッディー京北→上黒田へ
 ガイド料：人数割。1000円～1500円程/1名。片波川源流の伏条台杉群は京都府自然環境保全地域に指定されており原則地元ガイドの随伴

が必要となっています。

担当：野村綾子
 申込：12月1日までに担当者へ

ダンダ坊遺跡整備

実施日：2023年10月22日(日)
 集合：北比良イン谷口・レスキユウ小屋前
 時間：9時～15時
 目的地：北比良イン谷口 ダンダ坊遺跡
 作業：倒木処理・遊歩道確保等の整備作業
 持物：各自の弁当・飲み物等
 ノコ切り、チェーンソー、草刈機、斧、カマ等ある方はご持参ください
 担当：真名子栄一
 グループLINE【JAC 京都・滋賀支部】

北山探訪

◎向山△695.5m (Ⅲ向山)

実施日：2023年10月28日(土)
 集合：参加者に連絡
 目的地：由良川左岸から長老山塊を眺める
 行程：美山町安掛⇒静原⇒大野⇒向山橋⇒向山集落→・495→・540→△695.5m 向山→・609→・426→向山集落
 地形図：1/25000 図「和知」「胡麻」「島」
 山行の目安：体力3、技術3
 注：少々藪漕ぎあるかも
 担当者：田中昌二郎
 申込：10月18日(水)までに所定事項記入の上、FAXまたはメールにて

北山探訪

◎シンコボ△811.5m (Ⅲ永谷)

実施日：2023年11月11日(土)～12日(日)
 集合：参加者に連絡
 目的地：名田庄久坂から京大芦生研究林
 行程：11日(土)集合場所⇒名田庄久坂⇒出合小学校跡(テント泊)
 12日(日)出合小学校跡⇒廃村永谷→・379→野田畑峠→・731→シンコボ△811.5m(Ⅲ永谷)→・551→廃村永谷⇒集合場所
 地形図：1/25000 図「久坂」「古屋」
 内容：揚水発電所計画に消えた集落から芦生研究林最北のピーク周回
 山行の目安：体力3、技術3

〔注〕 少々藪漕ぎあるかも、テントお持ちでない方：相談ください

担当者：笠谷 茂

申込：10月31日（火）までに所定事項記入のメールで担当者まで

北山探訪：2023年の忘年山行

◎稲荷山△239.1m（Ⅲ西野山）

実施日：2023年12月16日（土）

集合：参加者に連絡

行程：JR 藤森駅→（京都東山トレール）→大岩山→仁明天皇陵→名神高速道マンポ→△三等三角点西野山→稲荷山→伏見稲荷大社→門前食堂

忘年会：今回は稲荷大社門前町の焼き鳥店にて

地形図：1/25000 図「京都東南部」

山行の目安：体力2、技術2

担当者：田中昌二郎

申込：12月6日（水）までに所定事項記入の上、FAX またはメールにて

未知の山旅（第13回）

◎青ヶ島、八丈島、八丈小島 黒潮洗う絶海の孤島と無人島の頂へ

実施日：2023年11月19日（日）～24日（金）

集合：東京竹芝桟橋、20時30分

行程案：計画具体化時に参加人数、宿泊先等で変更の可能性あり

19日（日）：集合場所→東海汽船八丈島行き乗船（22:30発）＜船中泊＞

20日（月）：八丈島港（8:55）、伊豆諸島開発青ヶ島行き乗船（9:30発）→青ヶ島港（12:30）大凸部（Ⅲ青ヶ島、423.0m）トレッキング＜民宿泊＞

21日（火）：外輪山（大人ヶ凸部）、丸山トレッキング→青ヶ島港八丈島行き乗船（12:50発）八丈島港（15:50）＜民宿泊＞

22日（水）：磯渡船乗船（6:30）⇒八丈小島島内側上陸点（7:00）→大平山（Ⅱ小島、616.8m）→上陸点（16:00）⇒八丈島＜民宿泊＞

23日（木）：八丈小島予備日、八丈富士、三原山トレッキング＜民宿泊＞

24日（金）：八丈島港東海汽船竹芝桟橋行き乗船（9:40）⇒竹芝桟橋（19:50）、解散

地形図：1/25000 図「八丈島南部」「八丈小島」「八丈島」

山行の目安：体力3、技術3

〔注〕 藪漕ぎあり、要船酔い対策

概算費：8万円（竹芝桟橋発着、船舶、民宿、食費、現地レンタカー）

担当者：笠谷 茂

申込：9月25日（月）までに所定事項記入のメールで担当者まで

秋のスケッチ

紅葉の嵐山から愛宕山を臨む

実施日：2023年11月24日（金）

集合：阪急電鉄嵐山駅前広場9時30分

担当者：山田和男

申込：11月10日（金）所定事項記入の葉書、FAX またはメールで担当者まで（翌週は担当者が旅行の為不在となります）

注意：紅葉の観光シーズン注意してください。前日6時前のNHK天気予報で降水確率50%以上時は中止します。

第7回 武奈が岳の日

実施日：2023年12月14日（木）

集合：イン谷口レスキュー小屋前

目的地：正面谷～コヤマの岳～岳道

地形図：1/25000 図「比良山」

山行の目安：体力3、技術2（深雪時は体力5）

担当者：松下征文

申込：山行申込書をメールで11月25日迄

歴史と文化の山旅

「再訪 近つ飛鳥風土記の丘」（小雨決行）

近つ飛鳥風土記の丘は日本を代表する群集墳である「一須賀古墳群」を保存し、直接に貴重な文化財に触れて、学べる史跡公園です。総面積29ヘクタールの園内には102基の古墳が保存されています。そのうち40基の整備された古墳内部を見学します。

前回は雨天の為中止になりました。古墳内部は暗く虫類も多いですが、寒い頃なので、虫はいません。ヘビ類も冬眠しているはずです。

時間と体力があれば、鎌倉幕府初代征夷大将軍の源頼朝の河内源氏の史跡も訪ねます。

実施日：2023年12月16日（土）

集合：近鉄喜志駅改札前 9時

行程：近鉄京都駅（7:14発）近鉄京都線急行橿原神宮前行き - （8:25着）橿原神宮前駅 - （乗り換え） - 橿原神宮前駅（8:31近鉄南大阪

線急行大阪阿倍野行き) - (8:52 着) 古市
 駅 - (乗り換え) - 古市駅 (8:57 発近鉄長
 野線準急河内長野行き) - (9:00 着) 喜志
 駅

山行の目安: 体力 1、技術 1 (歩行時間約 4 時間)

持ち物: 昼食弁当、雨具

担当者: 伊原哲士

申込: 12月9日(土)までに担当者まで

会務報告 支部役員会

第 448 回支部役員会

2023 年 5 月 10 日 (水) 18:30 ~ 20:20 (於) 鴨沂会館

出席: 14 名 欠席: 5 名

「開催挨拶」

2023 年度組織・役割分担: 6 月末を目途に整合したい

「報告」

4 月に実施された支部総会、未知の山旅、写真サークル、健幸登山教室 1、健幸登山教室 2、シャクナゲ山行について報告

支部長・事務局長報告

新支部長本部理事会 (4 月 12 日) 承認

コロナ対応の変化、NHK「日本百低山」への出演、支部会員への登山計画書提出ルール伝達等について報告

総務部会

会員動向について報告

山行部会、遭難対策部会、古道調査、出版関係、連絡事項など報告

「計画」

5 月、6 月第 1 週に実施予定の山行計画について協議、承認

全国、他支部関係行事への対応確認

支部だより発送にあわせ会員、友の会懇話会を開催

「その他」

支部会員名簿管理引継ぎについて

熊笹会静原荘の支部名での管理使用についての提案

第 449 回支部役員会

2023 年 6 月 7 日 (水) 18:30 ~ 20:00 (於) 鴨沂会館

出席: 14 名 欠席: 5 名

「開催挨拶」

2023 年度組織・役割分担整合の進捗状況伝達

「報告」

5 月に実施された支部総会、スケッチ山行、テント泊登山の会 (比婆山)、北山探訪 (中山・白尾山)、北山探訪 (品谷山・卒塔婆山) について報告

支部長・事務局長報告

梅雨入りを踏まえ、虫対策、食中毒対策、熱中症へ

の備えについて伝達

総務部会

会員動向について報告

HP メンテナンス契約検討

山行部会、遭難対策部会、古道調査、出版関係、連絡事項など報告

「計画」

6 月、7 月第 1 週に実施予定の山行計画について協議、承認

全国、他支部関係行事への対応確認

「その他」

支部の古道調査を目的としたカンパ実施の提案

第 450 回支部役員会

2023 年 7 月 5 日 (水) 18:30 ~ 20:30 (於) 鴨沂会館出席:

16 名 欠席: 3 名

「開催挨拶」

2023 年度組織・役割分担の整合完了

「報告」

6 月に実施された健幸登山教室 4 について報告

支部長・事務局長報告

支部連絡会 (6 月 8 日)、JAC 総会 (6 月 24 日) の報告

熱中症への注意喚起、山小屋の混雑、等について伝達

総務部会

会員動向について報告

HP メンテナンス契約を締結することを確認

山行部会、遭難対策部会、出版関係、連絡事項など報告

「計画」

7 月に実施予定の山行計画について協議、承認

全国、他支部関係行事への対応確認

(笠谷 茂記)

— 次号 153号 予告 —

2023年12月15日発行 原稿締切10月31日(火)
原稿送付先 編集担当 中川 寛



秋には南へ渡るアサギマダラと出会える
2022年10月初旬の京都市・嵯峨水尾

— あとがき —

「温暖化から沸騰化へ」。そんな声で始まった今夏の暑さは、確かに厳しいものでした。会員のみなさんは、どのように避暑されたでしょうか。まだまだ余談を許さぬ気温が続いていますが、やがて秋が来て、冬が訪れるのも確かではあります。

「京都、滋賀の山は、やっぱり晩秋がいいよ」。ある役員の方がおっしゃいました。紅葉が終わりに近づく頃でしょうか？ その時期に、わたしは実行してみたい山行があります。場所はまだ決めていませんが、トチノキの巨木を見に行きたいのです。

30数年前から落葉広葉樹の中でブナが俄然注目されるようになりました。やがて白神山地が世界自然遺産になり、ブナの森は「日本の宝」として多くの人々が認知するまでになりました。トチノキはブナに近接して生えてはいても、ブナのように群生はしないので見つけにくいことも多いそうです。生えているのは谷間の水気が多いところで、水分をたっぷり吸って成長を早めるので巨木になるということです。水源探しはトチノキ探しでもあると聞きました。

最近、森林学者たちは森の中でトチノキの生えている一角を「溪畔林」と呼ぶようになったそうなのです。この言葉、わたしはとても魅力的に感じます。沢登りに近いような登山愛好家ならではの森歩きを想像してしまいます。もしかしたら、溪畔林を歩くにはロープワークが必要かもしれません。この秋、難易度の低い溪畔林を見つけてトチノキの巨木に触れたい。みなさんもいかがでしょうか？

日本山岳会京都・滋賀支部会報「支部だより152号」

発行所 〒520-2101 大津市青山4-1-5
笠谷 茂方
日本山岳会京都・滋賀支部
発行者 笠谷 茂
編集者 藍野 裕之
印刷 〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
(株)土倉事務所
TEL 075-451-4844 FAX 075-441-0436

京都を学ぶ

京都学研究会 編



丸善 京都本店 地下2階にて
 「京都から自然に触れ学ぶ」フェア開催中！
 小社の山の本もぎょうさん置いていただきます。ぜひお越しください。

10月27日

宇治編 【新刊】
 平等院はなぜ宇治にあるのか？
 源氏物語に見る宇治 戦場としての宇治、宇治茶の科学など…

伏見編
 秀吉の「首都」伏見城下の姿、消えた「巨椋池」の物語、船宿の実態、日本酒ブランドと酒米など…

洛東編
 牛若・弁慶伝承、足利義政と銀閣（東山山荘）、清水焼と登り窯、京都人の愛する鴨川など…

洛西編
 名勝嵐山で知られる洛西。桂川、渡月橋、竹林、蚕の社、木鳥神社、天龍寺に代表される庭園文化など…

南山城編
 古来より京都と奈良を結ぶ回廊地域・南山城。木津川、緑茶、恭仁京、飛鳥仏教、流れ橋など…

丹波編
 山国・京都・丹波を再発見！ 明智光秀の統治、グンゼと蚕糸業、保津川下り、福知山鉄道など…

洛北編
 北山のヤママユ、葵が繋ぐ賀茂祭と将軍家、大原勝林院の秘仏、雑煮と納豆餅の関係など…

A5判・並製・184～242頁 各 2,420円(税込) ◆以下続刊

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15 <http://www.nakanishiya.co.jp/>
 電話 075-723-0111 FAX 075-723-0095 表示は税込価格です



【木津屋橋本店】
 〒600-8248
 京都市下京区大宮通木津屋橋下ル
 営業時間：10：00～19：00
 休日：無休(年末年始および夏期)

1F/一般車コーナー 075-341-7702
 2F/スポーツ車コーナー 075-341-7703

【久世店(オーダーフレーム工場)】
 〒601-8205
 京都市南区久世殿城町162
 営業時間：10：30～18：00
 休日：毎週水曜日・木曜日
 TEL：075-921-8679

I FEEL THE WIND



The Japanese Alpine Club
日本山岳会
 会員証

公益社団法人 日本山岳会
 〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4
 TEL: 03-3261-4433 <https://www.jac1.or.jp/>

●旧会員証でも構いません●
**日本山岳会 会員証のご提示で
 店頭価格から御値引いたします!**

※特価品・SALE品は対象外です。
 詳しくはスタッフまで!

取扱い
 ブランド

